

ヘッセ文学における愛と自由について

友 田 孝 興

内面への道を見出したものには、

熱烈な自己沈潜の内に

知恵の核心を、つまりは

自分の心は 神と世界を 形象として比喩として

選ぶに過ぎぬということを 感じ得たものには、

すべての行動と思维とは

世界と神とを包含する

自己の魂との対話となる。

Wer den Weg nach innen fand,

Wer in glühndem Sichversenken

Je der Weisheit Kern geahnt,

Daß sein Sinn sich Gott und Welt

Nur als Bild und Gleichnis wähle:

Ihm wird jedes Tun und Denken

Zwiesgespräch mit seiner eignen Seele,

Welche Welt und Gott enthält.

ヘルマン・ヘッセは「魂」(Seele)の詩人である。そして「愛の魔術」(Magie der Liebe)<sup>①</sup>を行使することによって、人間性の衰微を救済する愛の魔術師でもある。

詩人は常に、「自己の魂との対話」を通して詩作する。

そして、詩作することによって自己の魂を発露させ、自己の精神を開示する。と同時に、開示することによって、逆に、詩人自らが永遠の神性の中に織り込まれる。即ち、心を開くことによって神を開くのである。ここにヘッセという詩人の愛に充溢した誠実さがある。しかし、愛と誠実さの道は苦難と孤独の道である。安価な幸福か崇高な苦悩か。この熾烈な二者択一を迫る内面の声に、詩人は常に苦しめられねばならない。

この苦しみから生まれた「生」(Leben)に対する「畏敬」(Ehrfurcht)、「魂」(Seele)に対する「信頼」(Vertrauen)、最大の苦難の中にあっても消滅することがなく、どんな悪の退化からでも再び甦生し得る「一つの不思議な可能性」(eine wunderbare Möglichkeit)<sup>②</sup>としての人間に対する熱烈な「信仰」(Glaube)、ヘルソナの背後に仰圧された「内的生命感情の震撼」(Erschütterungen des

inneren Lebensgefühles)<sup>③</sup>に愛を捧げることによって、ファウスト的な分裂する二つの魂を生動的に融和し遊戯させる自由な精神、このような真の人間性を追求するヘッセの内面世界に焦点をあて、彼の愛と自由の意味するものを、この小論において把握してみたい。

## 註

① Hermann Hesse Gesammelte Schriften, Suhrkamp, 1958, 7—543.

② ibid. 7—610.

③ ibid. 7—594.

## 二

ヘッセ文学に決定的な方向性を与えたのは、第一次大戦を中心とする『危機』(Krisis)の時代である。

反戦記事による国賊としての非難中傷、父ヨハネスの逝去、末子マルティンの重病、妻マリアの精神病悪化、それに加え、詩人自身の憂鬱症亢進、これら一九一六年を中心とする一連の悲運によって、彼は危機の「絶望的深淵」(ein hoffnungsloser Abgrund)<sup>④</sup>に立たされる。

今や、詩人として彼に残された道は三つしかない。その一つは、苛酷な現実の『車輪の下』(Unterm Rad)で驚歎すべき悲劇的没落を演ずる道である。丁度、ヘルダーリ

ンとニーチエが現世を脱し、狂気の域にはいったように、あるいはまた、ノヴァーリスが己れを内面から燃焼して靈性の火花を迸らせながら死んで行ったように。しかしこの道は彼の道ではなかった。

第二の道は、真実を誤魔化して怠惰な市民生活に安住し、惰眠を貪りながら消極的自己保存の生活を送る道である。しかしこれとても彼にはできなかった。詩人としての質に対する感覚と精神への奉仕の使命感が、この万物を均等狭小化する妥協的市民生活に定住することを許容しない。それでは残る最後の道とは何か。内外の危機を超越する第三の道とは何か。ここに『内面への道』(Weg nach Innen)が詩人に開ける。

『内面への道』とは、『シッダータ』(Siddhartha)や『ガラス玉遊戯』(Das Glasperlenspiel)等に出て来るところの、ヘッセ文学の主導理念たる「冥想」(Kontemplation)・「観照」(Betrachtung)・「沈潜」(Versenkung)の立場であり、あの『荒野の狼』(Der Steppenwolf)の有和的「フモール」(Humor)の世界である。この「冥想」によって、詩人は自己の苦悩の責任を、自己の外部にではなく、内部に求める。「戦争は誰の罪でもなす」(Der Krieg ist niemandes Schuld)⑤。今や、全世界の狂気と

粗暴に対する非難の矛先を、彼は自己自身の内に向け、「混沌の凝視」(Blick ins Chaos)⑥に専心し、自らに「自己の内なる導きの声によって、「道徳的浄化」(moralische Reinigung)⑦と「良心の革新」(Gewissenserneuerung)を企てる。「人は自分の悩みと罪を認め、つきつめて悩み、その罪を他人に求めることをやめるならば、いつでも罪を脱することが出来る」(Man kann jederzeit wieder un-schuldig werden, wenn man sein Leid und seine Schuld erkennt und zu Ende leidet, statt die Schuld daran bei andern zu suchen)⑧のである。

哀れな姉妹たちよ、愛しい「悲痛」たちよ

お前たちも神の贈り物ではないのか

しかし誰もお前たちを持つとはしない

それならば私の心に住むがいい

Arne Schwestern, liebe Schmerzen,

Seid nicht ihr auch Gottsgaben?

Aber keiner will euch haben.

Wohnt denn in meinem Herzen!

およそ、ヘッセにとっては、事物の始源に無垢と単純の

みが存在すると思えるのは誤りなのである。創造された一切のものは、既に自己自身の内に矛盾を持ち、生成の混沌とした汚濁の流れの中に投げ込まれている。従って、自己の魂を単純化することによって、世界との和解はありえない。むしろ我々は、「全世界を痛々しくおし扱げられた魂の内に取り入れなければならない」(die ganze Welt in schmerzlich erweiterte Seele aufnehmen müssen)。<sup>①</sup>万有を包含する程に自己の魂を拡大し、「悲痛」を姉妹とすることによって、自己の「運命を愛する」(Schicksal lieben)。<sup>②</sup>ことを学ばねばならない。なぜなら、「運命は神から来る」(Schicksal kommt von Gott)。<sup>③</sup>のであって、「しかも」子供が女の胎内で育つように、運命は個々の人間の身体の中で成長する」(Wie im Leibe eines Weibes das Kind, so wächst Schicksal in eines jeden Menschen Leib)。<sup>④</sup>からである。母が子供を愛するように、我々は自己の運命を愛さねばならない。我々自身が育てた運命こそが、我々の神に外ならないからである。詩人にとっては、「善く苦悩し得るといふことは、完全に生きたことを意味する」(Gut zu leiden wissen, ist ganz gelebt!)。<sup>⑤</sup>樹木や草花が風雨の苦難を受けることによって成長するように、人間は運命の受難によって力を得、「行為」(Tat)を生

む。行為とは行動「Tun」ではない。「行為とは善き太陽から迸り出る光である」(Die Tat ist das Licht, das aus einer guten Sonne springt)。<sup>⑥</sup>この「行為」を生み出すことが詩人の永遠の課題である。「自己の運命に耐え、しかも単に耐えるだけではなく、それを完全に自己の内に取り入れ、それと一つになり、それを理解する」(sein Los ertragen, und nicht nur ertragen, sondern es ganz in sich aufnehmen, sich mit ihm eins machen, es verstehen)。<sup>⑦</sup>そしてそこから必然的に湧出して来る「新しい力」(neue Kräfte)と「行為」(Tat)とによって、自己の魂に「信頼と愛」(das Vertrauen und die Liebe)を確立すること、このことが詩人にとっては、自己の生を全うする上での不可欠な必要事なのである。

## 註

- ① ibid. 4—477.      ② ibid. 3—314.  
 ③ ibid. 4—480.      ④ ⑤ ibid. 7—536.  
 ⑥ ibid. 4—479.      ⑦ ibid. 5—723.  
 ⑧ ibid. 4—250.      ⑧ ibid. 7—206.  
 ⑩ ibid. 7—136.      ⑩ ibid. 7—206.  
 ⑫ ibid. 7—212.      ⑪ ibid. 7—211.  
 ⑭ ibid. 7—134.

## 三

ところで、この「運命愛」(amor fati)<sup>①</sup>と、そこから生まれて来る愛と信頼とを具備した「行為」(Tat)とを支える道は、「自由」であると同時に厳しい「孤独」の道である。孤独が運命愛を支え切れなくなったとき、人は「死」を選ばねばならない。孤独の傍には常に死が控えている。孤独は「深淵に沿った道」(Weg am Abgrund)<sup>②</sup>である。

ただ独り、私は立っている、風に引き廻され  
愛されもせず、見捨てられ  
敵意ある夜の中に

Einsam steh ich, vom Wind gezerrt,

Ungeliebt und verlassen

In der feindlichen Nacht.<sup>③</sup>

詩人は死の深淵をさま迷いながら孤独者の辛苦を嘗めねばならない。そして、神の不条理で残酷な振舞いに対し烈しい憤怒の念に駆り立てられる。しかしそれにもかかわらず、詩人は

本当に、神よ、私はおん身を愛す、そして熱烈に  
おん身の拙く支配する混乱した世界を愛す

Ja, ich liebe Dich, Gott, und ich liebe

Heiß die verworrene Welt, die Du schlecht regierst.<sup>④</sup>

と、力強い「生への愛」(die Liebe zum Leben)<sup>⑤</sup>の叫びをあげる。つまり彼は、分裂的強迫観念に苦しめられ、絶望の果てに自殺を試みようとするが、常に不思議とそこから生の秩序を回復する。彼の皮相的柔弱さの背後にあるこの内的強靱さの源泉とは一体何か。それは正しく神の意志への愛に充溢した絶対的献身に外ならない。

孤独者は人生に苦悩する。そして苦悩に耐えながらも、遂に耐え切れなくなったとき、苦悩は絶望へと発展する。この絶望の深淵において、詩人は自己の一切を神の意志に、運命に捧げ切る。これによって、彼の心内に「世界の意味、全存在の意味が新しく形成され」(wird der Sinn der Welt, des ganzen Daseins neu gestaltet.)<sup>⑥</sup>彼は益々運命を愛すること、"amor fati"の不可欠事を知らされる。

身を捧げよ、そして生を怖れるな!

身を捧げよ、そして死を怖れぬな、

Gib dich hin und fürcht das Leben nicht!

Gib dich hin und fürcht das Sterben nicht!

これが孤独者ヘッセの信念であり、生活形式であり、彼の全存在を貫ぬく生涯の帰結である。「一度、ただ一度、身を捧げ切ったもの、一度、大きな信頼を実践し運命に身を委ねたもの」(wer sich einmal, ein einziges Mal hingegeben hatte, wer einmal das große Vertrauen geübt und sich dem Schicksal anvertraut hatte.)<sup>⑧</sup> このものが真の自由と解放を得、「星の輪舞」(Reigen der Gestirne)<sup>⑨</sup>に加わることができぬのであり、すべての生は神から吐き出される一息であり、すべての死は神に吸い込まれる一息であることを知る。

呼吸には二た通りの恵みあり

空気を吸いて、またそれを吐く

かれは庄しつけ、これは爽かにす

かくも奇しく生は混じり合う

神汝を庄しつゝるとき神に謝せよ

神また汝を解き放つとき神に謝せよ

Im Atemholen sind zweierlei Gnaden:

Die Luft einzeln, sich ihrer entladen.

Jenes bedrängt, dieses erfrischt;

So wunderbar ist das Leben gemischt.

Du danke Gott, wenn er dich preßt,

Und dank' ihm, wenn er dich wieder entläßt.<sup>⑩</sup>

この世界の真意は「ただ自己の運命を勇氣を持って担うもの」「神聖な自己の内なる法則」(ein heiliges Gesetz in sich selbst)<sup>⑪</sup>に従うもの、「真の個人的な力のことになった生への憧憬」(die Sehnsucht nach einem wirklichen persönlichen intensiven Leben)<sup>⑫</sup>を抱くもの、即ち「マセの好む言葉で言えば、高し「我意」(Eigensinn)と云ふ」「自己の胸中の無言の絶対的法則」(das stille, unweigerliche Gesetz in der eigenen Brust)<sup>⑬</sup>を信奉するものとのみ開示される。

「地上の現象はすべて一つの比喩である。すべての比喩は魂が用意さえてきていれば、そこを通過して世界の内部へはいることのできる開いた門である」(Jede Erscheinung auf Erden ist ein Gleichnis, und jedes Gleichnis ist ein offenes Tor, durch welches die Seele, wenn sie



醒させる。外界の不条理さと同時に、自己の内面の残酷さが彼を突き上げる。今や、この内と外との不断に変化する状況に対しては、一瞬一瞬、新たに耐えて乗り越えて行くより外に道はない。しかし耐えて乗り越えるといつても、自己と外界とを含む世界の非守護性と不条理性に対して、常に敵対心でもって対決すれば挫折の到来は必然である。ここに、ヘッセは「畏敬」と「愛」と「信仰」とによって不条理な運命に「身を捧げる」(sich hingeben)。そして捧げることによって乗り越えるのである。「身を捧げる」とは「心の中の導き手」(Führer im eigenen Herzen)に委身帰命することを意味する。しかし、「心の中の導き手」に従うということは保証のない危険に身を置くことでもある。だが、この危険を通さない限り、現象の持つ比喩の意味は真に理解されない。そしてまた、現象の持つ美しさも、一つのロマン主義的幻想の中に消滅せざるを得ない。絶望と限界状況に耐え、しかも委身帰命することによって、一切に愛を捧げるのできるもの、即ち一切のものに対し微笑することのできるもの、このものが、新しい自己の信念と新しい自己の生活形式及び生命秩序に則って、力強い「行為」を生む。ゲーテのファウストはギリシア語の新約聖書を繙いて „Zölog“ を „Tat“ と訳して満

足するが、実にこの „Tat“ が神の啓示に外ならない。この「行為」を生むエレメントが、ヘッセにあっては「身を捧げる」ことなのである。そしてこの身を捧げることの母胎は「冥想」にある。冥想という東洋の概念も、ヘッセにあっては単なる借物的概念に終るのではなく、人間の運命を担う不可欠の受動的能動的要素なのである。「水は流れ流れ、絶えず流れて、しかも常にそこに存在し、常にあり、終始同一であり、しかも瞬間瞬間に新たにある」(Wasser lief und lief, immerzu lief es, und war doch immer da, war immer und allezeit dasselbe und doch jeden Augenblick neu.)<sup>④</sup>

この冥想・観照の立場は、たとえ自然界の一切の存在が自己の「現象形式」を変化しても、常に永遠の「不滅の生命」(unsterbliches Leben)<sup>⑤</sup>をその中に見るとどう、「欲望なき愛」(begierdelose Liebe)<sup>⑥</sup>の立場である。この立場に立ったときのみ、一切の事物は、その「事物の魂」(Seele der Dinge)<sup>⑦</sup>を、即ち「美」(Schönheit)を我々に開示する。

冥想・観照とは、「求める」(suchen)ことではなく「見出す」(finden)ことである。「見出す」とは「自由であること、心を開くこと」(frei sein, offen stehen)<sup>⑧</sup>



を意味する。そして、ここに見出されたものが「知恵」である。知恵は伝えることが可能であるが、「知恵は伝えることができない」(Weisheit ist nicht mitteilbar.)<sup>⑧</sup>。ただ知恵に支えられ、知恵を生きたるのみである。そして、この冥想による献身こそが、愛と精神を結合し、彼を神に向う愛の運動へと駆り立てる。

魂は 屈してはまた立ち上がり

無限の中で息つき

たち切られた糸で 新しく

いっそう美しい神の衣を織りなす

Seele beugt sich und erhebt sich,

Atmet in Unendlichkeit,

Aus zerrissnen Fäden webt sich

Neu und schöner Gottes Kleid.<sup>⑨</sup>

「魂は、くっせの全生涯は「魔法の力を求める願い」

(Wunsch nach Zauberkraft)<sup>⑩</sup>に支配されていたが、『危機』の時代の訪れによって、魔法の対象が外界の現実を越えて彼の内面に向けられる。つまり、外部への魔法が、冥想という内部への魔法に転化することによって、「未来と

過去とが彼の内面において接触し緊密に結合した」(Zukunft und Vergangenheit hatten sich in ihm berührt und einen innigen Verein geschlossen)<sup>⑪</sup>のがこの危機の時期である。そして、この「絶望的深淵」の時期に内面への魔法ともいうべき冥想によって、彼は「真の生命の予感」(des wahren Lebens Ahnung)を得、人間の有する「最高なる愛の」<sup>⑫</sup>、即ち「信仰と希望を備えた愛」(gläubige, hoffende Liebe)<sup>⑬</sup>を確立する。

#### 註

- ① ibid. 3—300. ② ibid. 3—549.  
 ③ Goethe, Faust, 1224 f.  
 ④ H. Hesse Gesammelte Schriften, 3—694.  
 ⑤ ⑥ ibid. 7—69. ⑦ ibid. 7—68.  
 ⑧ ibid. 3—723. ⑧ ibid. 3—724.  
 ⑨ ibid. 5—623. ⑩ ibid. 4—451.  
 ⑪ Novalis Schriften, Kohlhammer, 1960, 1—322.  
 ⑫ H. Hesse Gesammelte Schriften, 6—553.  
 ⑬ ibid. 5—741.

#### 五

さて、冥想と共に、もう一つこの時期に欠くことのできない要素として、ドストエフスキー体験がある。我々がドストエフスキーを読まねばならぬのは、我々が苦悩に耐え

得る能力の極限まで苦惱し、希望を失って死のうとするときだ、とヘッセは言う。西洋の合理主義下にあつては、感性の認識機能が極度に軽視され、個定化した悟性や理性による魂の抑圧の支配が優位を占める。ところが、この敵対的抑圧の優位が没落するや、被抑圧的衝動が爆発し、カラマゾフ兄弟たちが生まれて来る。しかし「カラマゾフ兄弟たちには罪がなご」(Die Karamasoffs sind unschuldig.)<sup>⑧</sup>。なぜなら、彼らは常に自己の魂を問題としていからである。むしろ、秩序を代表する検事や大審問官たちこそが、狭量と疑懼と固陋からの殺人者なのである。既存の秩序の中だけに眼を向けるのではなく、人間性の地下に働く未知の生成に眼を注がなければならない。経験的世界や生の外面的形態のみが人間存在の窮極的現実ではない。

ヘッセがいわゆる「現実」というものに魔法をかける意味がここにある。意識的現実の背後に生動する無意識的宇宙の存在することを忘れた皮相的人間把握からは、何の「行為」も生まれない。ただ残忍な「行動」が先行するのみである。「畏敬がなければすべての精神は悪と化す」(ohne Ehrfurcht ist aller Geist böser Geist.)<sup>⑨</sup>

「精神と魂」、「悟性と心情」、これらの一方を重視するということがすでに病的なのである。詩人は声を大に

して「生に対する畏敬を学べ」(Lernet Ehrfurcht vor dem Leben.)<sup>⑩</sup>と強調する。ヘッセにとっては、「精神」(Geist)は「神的」(göttlich)で「永遠」(ewig)で「父性的」(väterlich)である。しかし母性的な「魂」(Seele)の蔑視を志向するような人間精神はもはや精神ではなく、悪と化するのだ。

「人、全世界を得くとも、己が魂を損ぜば、何の益あらん」(Was hülfte es dir, wenn du die ganze Welt gewännest, und nähmest doch Schaden an deiner Seele.)<sup>⑪</sup>魂の犠牲において、魂の周囲に堡壘を築くことにおいて実利を得ても、それは何の幸福をも齎らさない。「魂の自由」、これこそが人間存在を支える根源的基盤である。

『危機』の時代は、シュペングラの『西洋の没落』(Untergang des Abendlandes)が叫ばれた時期であるが、ヘッセはこういう終末を見る目的論的歴史哲学を否定した。人間というものが、世界理性の目的実現のための手段として、その犠牲にならねばならぬというヘーゲルの「理性の狡智」(List der Vernunft)からは、人間の実存状況における厳しさを説明することではできない。ロゴスを基とす理性和概念によっては、パトスの存在たる生きた選択と決断を迫られる孤独者・人間を把握することは不可能



り、最後には無規定の自由に陥り破綻する。

あるいはまた、自意志による善なる方向性を持ったとしても、神なき愛・神なき人道主義の道を進むならば、逆に強制と必然を生み、人間蔑視と人間の畜群化を樹立する。換言すれば、神なき自意志としての自由は、幸福という名のもとに社会の蟻塚化をなし、強制的圧政を生むのである。強制された善や幸福はもはや善でも幸福でもない。

ここに背徳とニヒリズムと人神への道を克服する第二の道として、「大きな自由」(Libertas maior)、即ち神と善の内における倫理的信仰の自由が開ける。この宗教的良心の自由を得、自己の魂の中に神を認めるならば、人間はいかなる絶望からも脱却することが可能となる。

ところで、我々にとって大切なことは、この第二の善の内における自由は、第一の恣意的選択の自由における苦悩の過程を通さない限りは、真に生まれては来ないということである。つまり、選択と決断を迫られ、精神的苦悩の限界まで苦悩し、自由の悲劇性を自己の深奥において感得したものの、即ち、悪と混乱をも誘発する自由の重荷を、苦悩と絶望の深淵において感知し、無限に偉大なものの前に跪いたもの、このものが、背徳とニヒリズムと強制を脱し、第二の善の内における精神の自由と新生を得るので

ある。自由の道は、苦悩と絶望という悲劇性を孕んでいる。しかし、すべての真の悲劇と同様に、この悲劇は自己の内にも自由の浄化と解放を有している。従って、分裂と苦悩を伴った自由の深淵を窮極まで辿るならば、最後には精神の自由を獲得し、新しい秩序のもとに、世界の調和を創造することが可能となる。

ヘッセはこのドストエフスキーの自由観によって、魂の新しい見方と立場を学び『危機』の時代のニヒリズムを克服する。

カラマゾフ人たちは善と悪、神と悪魔とを同時に所有する予測し難き「未来人」(Mensch der Zukunft)<sup>①</sup>であり、混沌とした無形態を目指す「没落人」(Mensch des Untertages)<sup>②</sup>である。しかし、混沌から必ずしも悪と犯罪が生じなければならぬということはない。「原衝動」(Utrieb)に善なる新しい方向性を与えれば、新しい秩序が生まれる。混沌とした無意識界の母権を樹立することは、一見、怖ろしい秩序の敵である。しかし、それは混沌に留まるためではなく、存在の根源に触れ、新たな創造と価値づけを行うためには不可欠のことなのである。つまり、「宗教的な無政府状態は過渡的にのみ許される」(Der Zustand

religiöser Anarchie darf nur vorübergehend seyn.)<sup>②</sup>

ここでヘッセは、劫初より存在して未来の一切を生むところの創造神・「神であり同時に悪魔でもある神」(Der Gott, der zugleich Teufel ist)・デミウルク „Demirug“<sup>③</sup>の帰還を試みる。つまり、プラトンの『ティマイオス』の中に出て来る世界の創造主「デミウルゴス」(δημιουργός)にまで溯ることによって、既成の善悪秩序を廃棄し、極と対極とが同等の正当さでもって存在することの不思議を体得する。

ドストエフスキーによって与えられた「自由」と「没落」の意味は大きい。あのシュペングラの「西洋の没落」という言葉の代りに、ヘッセは「ヨーロッパの没落」(Untergang Europas)という彼独自の言葉を使用する。彼にとっては、「没落」は単なる終末論的阿鼻叫喚を伴った恐怖の破局ではなく、一切を肯定し、一切を理解し、一つの新しい危険なまでに怖ろしい神聖さを実現せんがため、積極的新生の端緒を意味する。つまり、「没落」とは、プラトンの「デミウルゴス」への回帰であり、ゲーテの『ファウスト』における「母たや」(Mütter)への即ち、時空を超えた一切の事物の根源・原型のがみ存在する永遠の寂寥境への、「生命なくして動く生命の形態」

(des Lebens Bilder, regsam, ohne Leben)<sup>④</sup>のみが漂う

真理野への帰還を意味する。——(但し、このヘッセの没落観はドストエフスキーのとは多少意味あいを異にする。前者にあつては無意識界の生の深淵に統一と静安を予想するが、後者にあつては存在の激情的動性をその中に見る。)——しかしいずれにせよ、ヘッセはこの「没落」によって新生を得、「魔術的思惟」(das magische Denken)<sup>⑤</sup>という新しい愛の認識法を確立する。

ニーチェのツァラトゥストラの「没落」は超人 „Übermensch“への意志に燃えた積極的没落であったが、ヘッセの「没落」は帰依の、身を捧げることの没落である。この没落によって、彼は魂の新たな自由な認識法を獲得し、『危機』の時代の絶望の深淵から脱出する。

註

- ① ibid. 7—169.      ② ibid. 7—166.  
 ③ Novalis Schriften, 3—511.  
 ④ H. Hesse Gesammelte Schriften, 7—165.  
 ⑤ ibid. 7—173.  
 ⑥ Goethe, Faust, 6430.  
 ⑦ H. Hesse Gesammelte Schriften, 7—182.

やつてここで、我々はハッセ文学における見えざる中心点であり、彼の一切の方向を濃縮している『危機』の時代の観察を基礎として、彼の「魔術的思惟」の核心に触れなければならぬ。

「生命根源の戦慄と不安」(Zittern und Bangen an den Wurzeln)・「無形態の現存在」(ungestaltetes Dasein)にまで没落することによって「母性的な本源の声」(mittlerische Urstimme)を聴いた詩人にとっては、もはや「善と悪を新たに定めるのはデミウルクの仕事ではなく、それは人間と人間のより小さな神々の仕事である」(Gut und Böse neu zu setzen, das ist nicht Sache des Demijuren, sondern Sache des Menschen und seiner kleineren Götter.)。「人間のより小さな神々」とは「敬虔な魂」, *anima pia* “であり宗教的「良心」である。「良心」とは、神と面を向け合い、神的な統一へ近づこうとする人間の最高の心的能力であり、空文句や集団の催眠に對抗し、品位と勇氣ある人間存在を創造する「素朴な人間性の原則」(die Grundsätze einfachen Menschentums)である。この「良心」・「素朴な人間性の原則」の上のうち立

てられたのが「魔術的思惟」である。

ところでこの「魔術的思惟」の根本命題は「時間は存在しない」(Es gibt keine Zeit.)と云ふことにある。

魂よ、今こそ時間から脱却せよ

お前の心配から脱却せよ

Entreiß dich, Seele, nun der Zeit,

Entreiß dich deinen Sorgen.

真の自由を得るためには時間から脱却しなければならぬ。この時間からの脱却を可能にするエレメントが「魔術」(Magie)である。「魔術は錯覚を止揚する。魔術は我々が、時間、と呼ぶあの最悪の錯覚を止揚する」(Magie hebt Täuschungen auf. Magie hebt jene schlimmste Täuschung auf, die wir, Zeit, heißen.)。物理的客観的時間を離れ、内的主観的時間が詩人の問題である。あの水の流れの同時性を見る「冥想」は、実は「魔術的思惟」の母胎なのである。『シッダールタ』の救いは、時間の迷妄性を開悟するところにある。善悪美醜の対立と世界の複雑さは時間に起因する。時間の観念を打破し、それを止揚滅却するところに、人は現象界における一切の迷妄対立から

脱却し、魂の自由を得るのだ。

「深い冥想の中に、時間を止揚し、一切の存在した生命、存在する生命、存在するであろう生命を同時的なものと見る可能性がある。そこではすべてが善く、完全に梵(ブラフマン)である」(Es gibt in der tiefen Meditation die Möglichkeit, die Zeit aufzuheben, alles gewesen, seiende und sein werdende Leben als gleichzeitig zu sehen, und da ist alles gut, alles vollkommen, alles ist Brahman)。<sup>⑧</sup> 人間性の全面解放と自由を「Magie」と「冥想」による時間の破壊止揚以外にはありえない。魔術的冥想の瞬間における時間の廃棄こそが、存在と生成、変化と恒常性とを和融融和し、「自然と精神との極の間を動く生命の振動」(Schwingen des Lebens zwischen den beiden Polen der Natur und des Geistes)に虹の橋を架けることのみを唯一の道である。「陰と陽とは互に遊戯すべきであって、互に争うべきではない」(Yin und Yang sollen miteinander spielen, nicht miteinander streiten)と詩人は言ふ。彼は遊戯、即ち「愛の戦い」(Liebeskampf)の内を、「らししえの高き」(die alte Höhe)と未来の可能性とを結合し、抑圧のない秩序を築こうとする。この遊戯と愛の戦いは時間の止揚か

ら生まれる。なぜなら愛の成立条件は「無限の献身」(die grenzenloseste Hingebung)にあり、無限の献身は張りつめた尖鋭化された峻厳な無時間的瞬間の決意性、"Entschlossenheit"において可能となるからだ。瞬間における献身と魔術的同時性の直観把握、これこそが愛と遊戯を生み、自己の限界の自覚を通して、不滅の存在を仰ぐ契機を我々に与える。詩人にとっては、常に「シバ」(Shiva)の破壊の後には「ヴィシヌス」(Vishnu)の創造が控えている。そしてこの両者を、永劫を司る「ブラフマン」(Brahman)が大きく包んでいる。この三者を遊戯の内に見るのが「魔術的思惟」である。人間存在を道徳的にも肉体的にも解放し、魂の自由を実現する「魔術的思惟」によって、詩人は悟性の暴力的専制を排除し、感性の自由を回復する。そして、時間を止揚した遊戯の内に、彼は感性衝動と形式衝動とを和融させ、不思議な可能性としての人間存在に愛と畏敬を捧げるのである。「何ものも外になく、何ものも内になし、外にあるものは内にあればなり」(Nichts ist außen, nichts ist innen, denn was außen ist, ist innen)。<sup>⑨</sup> 内と外との区別を超えた対立の彼岸において、「新たな別の認識」(neue, andere Erkenntnisse)が始まる。これが「魔術的思惟」なのである。

## 註

- ① ibid. 7—594.      ② ibid. 3—332.  
 ③ ibid. 7—146.      ④ ibid. 7—173.  
 ⑤ ibid. 7—540.      ⑥ ibid. 3—553.  
 ⑦ ibid. 5—736.      ⑧ ibid. 3—595.  
 ⑨ ibid. 3—726.      ⑩ ibid. 4—486.  
 ⑪ ibid. 7—629.      ⑫ ibid. 3—300.  
 ⑬ ibid. 7—766.  
 ⑭ Novalis Schriften, 1—289.  
 ⑮ H. Hesse Gesammelte Schriften, 2—839  
 ⑯ ibid. 2—842.

## 八

次に、我々はこの「魔術的思惟」から来る「新たな認識」を、神と愛と精神の三方向において把握してみよう。

- 先ず「神」についてであるが、『デーモン』(Demian)の神は「アブラクサス」(Abraxas)と云ふ。これは神でもあり悪魔でもある。明るい世界と暗い世界を同時に持つてゐる。つまり、先に述べた「デミウルク」として「Gott-Teufel」の言い換えである。「人は悪魔をも自己の内に含むところの神を造りねばならぬ」(Man müßte sich einen Gott schaffen, der auch den Teufel in sich einschließt)。<sup>①</sup>なぜなら、悪魔、即ち無意識界の生命力

そが、丁度、ゲーテの色彩論において、闇が光の創造的対極としての重要な意義を持ったように、人間存在を支える不可欠の半面だからである。光だけでは色彩は生じない。光と闇との遊戯によってこそ色彩という愛の世界が現出する。「鳥は卵から脱け出ようともがく。卵は世界である。生まれ出んと欲するものは、一つの世界を破壊せねばならぬ。鳥は神に向かって飛ぶ。神の名はアブラクサス」(Der Vogel kämpft sich aus dem Ei. Das Ei ist die Welt. Wer geboren werden will, muß eine Welt zerstören. Der Vogel fliegt zu Gott. Der Gott heißt Abraxas.)<sup>②</sup>。クッセはこの「アブラクサス」という名前を、「神的なものと悪魔的なものとを結合する象徴的使命を有する神性」(Gottheit, welche die symbolische Aufgabe hatte, das Göttliche und das Teuflische zu vereinigen)<sup>③</sup>として考へる。即ち、彼にとっては、「神性」(Gottheit)は神的なものと悪魔的なものとを結合包含する使命を有しているのだ。「Gott」は世界の明るい半面だけしか表わさないが、「Abraxas」は明闇両面を包括する。それ故に、詩人は「アブラクサス」の内に真の神性を見る。彼にとつては、全世界を、明と闇とを包含するものこそが、神性なのである。鳥は、生まれ出るためには、卵の殻を破壊しなければ





ことができない。愛は統一よりも分裂を齎らす可能性をも秘めている。しかし、「彼にとつては子供のいない幸福と喜びより、愛の悩みと心配のほうが好ましかった」(Hieber war ihm Leid und Sorge der Liebe, als ihm Glück und Freude ohne den Knaben gewesen war.)<sup>⑤</sup> 子供に對する盲目的な愛は煩惱であり、濁った泉であることを彼はよく知っている。しかし同時に、その煩惱の中にも、不滅の神性が働いている。煩惱に苦しみながらも、「忍耐(ryōjō)に愛」(geduldige Liebe)と「愛する忍耐」(lieben-des Dulden)<sup>⑥</sup>とが我々を最後に「神聖な目標」(heiliges Ziel)<sup>⑦</sup>に近づける。苦悩に耐え、運命と「共に悩む」(mit-leiden)<sup>⑧</sup>、これが『シッタールタ』の統一に帰属する悟りである。世界と自己と万物を軽蔑してはならない。愛と讚嘆と畏敬をもって眺める必要がある。物が仮象というなら、自己も仮象である。物と自己とは常に同類なのだ。だから詩人は物を愛する。彼にとつては「愛こそ一切の中で最も重要なものである」(Die Liebe scheint mir von allem die Hauptsache zu sein.)<sup>⑨</sup>

詩人の愛は、常に不死性の肯定と結びついている。即ち、愛の中に神性が働いている。従つて、ディオニエーンズ的な法も形式も知らない愛の熱狂は、人間を分裂と苦悩

に陥落させかも知れないが、同時に、献身し身を捧げることによつて、この分裂と苦悩とを自己の中に受容するならば、逆にこの分裂苦悩が、人間の内なる神を開き、力と愛としての「生きた神」を我々に開示する。

ところで、詩人は「魂は愛である」(Seele ist Liebe.)<sup>⑩</sup>と云う。「魂の中にはただ、衝動と未来と感情があるだけである」(In Seele ist bloß Trieb, bloß Zukunft, bloß Gefühl.)<sup>⑪</sup>要するに、魂とは「無窮の存在の暗い豊かさ」(dunkle Fülle seines unermesslichen Daseins)<sup>⑫</sup>を持つ混沌とした母性と愛との母胎である。従つて魂の自由ということは、背徳とニヒリズムの危険性を有している。しかし、母性的な魂の自由な発露を排除することは、愛の涸渴を意味する。そして愛の涸渴は生命の全体的統一性への回復を阻止する。人間は魂の表出によつて自己の役割と任務を果すのである。魂の自由な表出發露を通して愛を「le-bendig」なものとする。しかし、魂はただ発露するだけでは背徳とニヒリズムに墮落する。どうしても「身を捧げる」ことが不可欠の要素となる。「魂はただ発露することと捧げることによつてのみ栄える」(daß Seele nur im Aufzeigen und Hingeben gedeiht.)<sup>⑬</sup>

魂の繁榮が自由な発露と献身を必要とするように、愛も

自由な熱狂だけでは統一的調和原理にはなり得ない。むしろ、統一性を破壊し内的分裂を増大さすばかりである。ここに「Aufzeigen」と同時に「超時間的な、Hingehen」が不可欠となる。愛と自由とは不可分離の相互存在である。と同時に超時間的不死性を支える献身と結合することによって、愛の魔術は統一的創造的存在力となる。シッダールタの微笑やゴルトムントの死の安らかさが、このことをよく明示している。愛の自由が不滅と結合したとき、「いや、愛されることは幸福ではない。だが愛すること、これこそ幸福だ」(Nein, geliebt werden ist kein Glück. Aber lieben, das ist Glück!)<sup>⑥</sup> という信念を生み、愛が救済力となる。

死と運命、及び無意味性と罪過の不安は、我々に非存在の脅威を痛感させる。しかし、非存在・非守護性の残忍さを、身を捧げることによって自己の内に受容する愛の勇氣こそが、人間存在に、歓喜と幸福を齎らす。運命を愛することは忍従ではない。愛することによって、逆に運命を超えるのである。そして、それを超えたところに、超時間的永遠性の輝きを持った神性との出遇いが可能となる。自己の運命を「勇氣をもって悩むこと」(Tapfer zu sein und zu leiden)<sup>⑦</sup>、そして自然と精神に対する不安を、愛と献身と

によって畏敬と敬虔とに変えること、これこそが詩人の訴えたい使命である。「詩人として私がただ一つ教えたいたい」と、あるいは私が訴えたいと思うまさにそのことは、「畏敬と敬虔」(Gerade das, was einzig ich als Dichter gerne lehnen) oder woran ich appellieren möchte: die Ehrfurcht<sup>⑧</sup>とハッセは言う。畏敬・敬虔とは、「自己の魂の内に莊重な感情を養うことを意味するのではなく、「包含されていることの、共に責任を負っていることの感情」(Gefühl des Einbezogenseins und Mitverantwortlichseins)<sup>⑨</sup>である。この感情を生む源泉が、愛と献身と冥想なのである。愛と献身と冥想から生まれた畏敬の念を持つものといえども、自己の運命を排除することも、非存在の脅威から逃れることもできない。しかし、いかなる絶望も、存在自体の力によって、内面から克服し得るものだという信念を生む。これによって、乱された生命が秩序と平衡を回復する。つまり、愛が不死性に対する畏敬を伴った献身帰依と結合するとき、我々はいかなる生活にも耐え得る力を獲得する。

## 註

①② Ibid. 3—189.

③ Ibid. 3—706.

④⑤⑥ Ibid. 5—741.

⑦ Ibid. 7—532.

- ⑧ ibid. 3—729.      ⑨ ibid. 7—76.  
 ⑩ ibid. 7—77.  
 ⑪ Novalis Schriften, 1—252.  
 ⑫ H. Hesse Gesammelte Schriften, 7—73.  
 ⑬ ibid. 3—513.      ⑭ ibid. 7—517.  
 ⑮ ibid. 7—505.      ⑯ ibid. 7—591.

## 十

ちて、最後に、我々は献身の対象たる不死性に眼を向け、「精神」の意味を理解することによって、魔術的思惟についてのこの小論を閉じたいと思う。

混沌とした現存在の「暗い豊かち」(dunkle Fülle)を通して、再び光明と秩序ある「明かるい」(heiter)世界への道を切り拓き、「不滅の人々の協同体」(Gemeinschaft der Unsterblichen)<sup>①</sup>に参入することが人間存在にとって欠くことのできない使命である。元来、「dunkel」と「heiter」とは、詩人にとっては、対立概念ではなく遊戯概念であり、相互に滲透波動作用を行しながら、真の人間性へと我々を導いて行く。この両者を「よし」とする生の自己肯定から、我々は新たな自己を乗り越えようとすする勇氣ある生を創造する。否定のための否定ではなく、肯定のための否定を包含する自己肯定によって、「自己の内

に燃えあがる生命感情」(sein innig aufflammendes Lebensgefühl)<sup>②</sup>に畏敬の念を捧げ、「憂鬱な深い内向性から宇宙的・神的な秩序へ」(aus der schweremütigen Tiefe der Introversion in die kosmische und göttliche Ordnung)<sup>③</sup>と自己の道を一歩進めなければならぬ。即ち「貴重な自我を再び世界の中へ没落させ、永遠な超時間的秩序の中に自己を編入する課題」(die Aufgabe, das wertige Ich wieder in der Welt untergehen zu lassen und sich den ewigen und außerzeitlichen Ordnungen einzureihen)<sup>④</sup>が我々に残されている。没落は容易い。没落から脱し、否定を肯定に導く精神こそが、人間存在にとって不可欠の要素なのである。詩人は無邪気な芸術家の遊戯ともいうべき『ガラス玉遊戯』において、我々の眼前に、「愛の魔術による「小さな愛らしい遊戯世界」(kleine geliebte Spielwelt)<sup>⑤</sup>を展開する。そしてこの「精神遊戯」(Geist-Spiel)<sup>⑥</sup>を通して、我々の心に眠る敬虔と良心を目覚めさせ、精神と奉仕の意味を明示する。理想郷カスターリエンの「生きた統一」(lebendige Einheit)<sup>⑦</sup>を目指す理念は、既にプラトンやゲーテ等において古くから存在したが、今、詩人は、フェュルトンの腐敗の時期に、再びこのプラトンの理念を呼び出すことによって、真理と真理への努

力を救済し、生命の神聖さに仕えようと試みる。理念を呼び出すということ自体は些細なことであるが、しかしこの小さな一歩こそが、理念を「生誕の可能性」(facultas nascendi)<sup>⑧</sup>に近づける道なのである。理念を生誕の可能性に「一歩だけ近づける」(paululum appropinquantur)<sup>⑨</sup>、このことが、漫談や無責任というフェュエトン時代における詩人の使命である。

シラーは「感性衝動」(der sinnliche Trieb)と「形式衝動」(der Formtrieb)とを「遊戯衝動」(der Spieltrieb)によつて結合し、「生命」(Leben)と「形態」(Gestalt)とを「生ける形態」(lebende Gestalt)の中に包括することによつて、人間に真の自由を与えようとしたが、ヘッセもこのシラーの自由な遊戯精神を、ガラス玉遊戯によつて再生する。つまり、精神への奉仕によつて、「精神的なるものの生きた美しさ」(die lebendige Schönheit des Geistigen)<sup>⑩</sup>と「魔術的形成力」(die magische Formulierkraft)<sup>⑪</sup>とを「遊戯」という神秘的結合の内に受容し、真の生命を、即ち「永遠に働きとして生くる生成の力」(das Werden, das ewig wirkt und lebt)<sup>⑫</sup>を「生きた統一」(lebendige Einheit)へと導くことが、ヘッセ文学の中心理念である。彼にとつては、人間の一切の生命

を賭けた精神的努力は、内面的に一体であるという総合性への努力、即ち、対立を正しく認識し、更に、魔術的超時間的思惟によつて、対立を対決としてではなく、統一の両極として把握するという新しい認識への努力でなければならぬのだ。

ところで、彼は精神を先ず第一に、不滅の「真理への意志」(Wille zur Wahrheit)<sup>⑬</sup>と見る。従つて、精神は真理に對して従順である場合にのみ有益で高貴な品位を持つが、真理を裏切り、畏敬の念を捨て去るや、潜在的な悪魔と化す。元來、精神は、魂の自由から出発し、淨化と解放を求める戦いの最後の帰結として抽象化された超時間的不死性の性格を有する精華である。従つて、精神の相続者・受益者は、常に精神形成における苦難の歴史を忘れてはならない。真理への意志が衰微し、歴史を知らぬ単なる精華としての精神は、生活と人間性の全体から分離し、「高慢な孤独」(hochmütige Einsamkeit)<sup>⑭</sup>に墮落する。我々は自己自身が歴史の一員であり、世界史に對して「共に責任を負っている」(mitverantwortlich)<sup>⑮</sup>のであつて、この責任の意識を欠くならば、精神は固陋に陥り、人間の自由と勇氣を奪ひ去る悪と化するのだ。真理も精神も生きていなければならぬ。即ち、単なる形態として講義の対象となる

のではなく、「生ける形態」として生活されなければならぬ。「悪魔と魔神も知らず、それらに対して絶えず戦うこともしないような、高貴な高められた生活はない」(Es gibt kein adliges und erhöhtes Leben ohne das Wissen um die Teufel und Dämonen und ohne den beständigen Kampf gegen sie.)<sup>①</sup>のであって、善の内における「大きな自由」に支えられた精神生活といえども、我々に樂を与えるような知恵は保持しない。「内と外との出遇」と確認」(Begegnung und Bestätigung des Innen und Außen)<sup>②</sup>を通して苦を乗り越えて行くより外に精神を、lebendig“に保つ道はないのである。

「人間は努力する限り迷う」(Es irrt der Mensch, solang' er strebt.)<sup>③</sup>。しかし、「絶えず努め励むものを我らは救うことができぬ」(Wer immer strebend sich bemüht, den können wir erlösen)<sup>④</sup>と天使は歌う。精神への奉仕と真理への努力の苦悩なしに、精神と真理を享受相続することは許されない。つまり、魂の自由なしに、「小さな自由」による苦悩と迷いの過程を経ることなしに、精神の「大きな自由」はありえない。精神は愛を喪失してはならない。なぜなら、本質と現象形式とに愛を捧げることによって、生命の全体的統一性が回復され、精神の自由が

獲得されるからである。精神の自由と魂の自由とを、愛と献身の架橋によって結合融和するところに、神性が現われ、真の生命に対する畏敬が生まれる。ゲーテは『西東詩集』(Westöstlicher Divan)の中「死して成れ」(Stirb und werde!)と叫ぶ。つまり、捨身の行が、一切の生成の根源力であり結合力である愛と同時に作用し合ったとき、一瞬は永遠と化し、「捨身は悦びである」(Sich aufzugeben ist Genuß.)<sup>⑤</sup>という不思議な精神の自由が開示される。魂と精神とが、「身を捧げる」という愛の行為によって「生きた統一」の中に受容されたとき、神性は大きな自由の光を我々の頭上に放つのである。

以上、この小論においては、ヘッセ文学における愛と自由の問題を、彼の危機の時代の考察をもとに概説してみた。次の機会には、この問題をもう少し詳細に世界の精神史の上で論じてみたい。

註

- ① *ibid.* 7—708.
- ② *ibid.* 6—539.
- ③ *ibid.* 7—707 f.
- ④ *ibid.* 4—485.
- ⑤ *ibid.* 4—487.
- ⑥ *ibid.* 7—562.
- ⑦ Goethe, *Maximen und Reflexionen*, 571.
- ⑧ H. Hesse *Gesammelte Schriften*, 7—666.
- ⑨ *ibid.* 6—79.
- ⑩⑪ *ibid.* 6—85.

- ⑳ Goethe, Faust, 346.
- ㉑ H. Hesse Gesammelte Schriften, 6—459.
- ㉒ ibid. 6—509.      ㉓ ibid. 6—458.
- ㉔ ibid. 6—383.      ㉕ ibid. 6—130.
- ㉖ Goethe, Faust, 317.      ㉗ ibid. 11936 f.
- ㉘ Goethe Werke, 2—19.
- ㉙ ibid. 1—368.

邦語参考文献

Hermann Hesse, Hugo Ball.

Die Begegnung des Christentums mit den

asiatischen Religionen im Werk H. Hesses, Gerhart

Mayer.

Hermann Hesse, Werk und Leben,

Gothilf Hafner

Hermann Hesse, Vom Wesen

der Musik in der Dichtung, Werner Dürr.

Hermann Hesse, Studien zu Werk und

Innenwelt des Dichters, Richard B. Matzig

The Novels of Hermann Hesse,

Theodore Ziolkowski

ルマン・ヘッセ (外村完二)

ヘッセ研究 (秋山六郎兵衛)

ヘッセ研究 (高橋健二)

ヘッセ研究 (三笠版全集別巻)

マンハイム・ヘッセの世界観

(ニコライ・A・メルジャエフ、宮崎信彦訳)

(本学助手、ドイツ文学)

(九二頁より)

五月十二日(火) 二回生Aクラス

見学地—黄檗山万福寺・放生院・平等院その他。

参加—仲野助教、今井助手、学生五十名。

五月十九日(火) 二回生Bクラス

見学地—浄瑠璃寺。

参加—平野助教、河内助手、今井助手、学生四十名。

五月二十二日(金) 一回生Aクラス

見学地—黄檗山万福寺・放生院 興聖寺その他。

参加—片岡講師 今井助手 学生四十八名。

五月二十九日(金) 一回生Bクラス

見学地—天竜寺、小督塚、野宮神社、清涼寺、厭離庵、祇王

寺、化野念仏寺。

参加、渡辺助教、今井助手、学生五十一名。

◇葵祭見学 五月十五日(金) 一回生全員